

よみがえる酒田

—大火復興のあらまし—



1979. 8.

酒田市

ごあいさつ

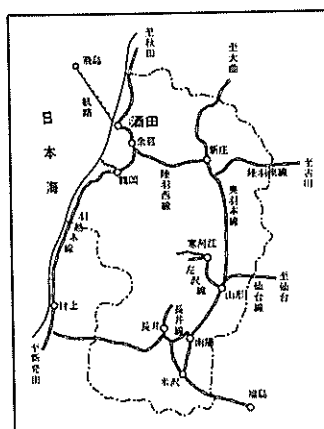
10万市民にとって一日も忘れることのできない忌しい大火から、二年半を経過しました。「防災都市づくり」を旗印とし、全市民一丸となつて早期復興に立ちあがつた訳ですが、想像をはるかに超える困難な、そして極めて厳しい大事業であつただけに、復興への道は、重い荷を背負つてゆつくり歩むことは許されず、走りながら考える日日の連続でございました。

それにもかかわらず、あの焼野原に新しい住宅街と、近代的商店街が短期間に誕生し、広い道路と緑の公園も立派に完成して、今年5月、待望の復興を宣言することができました。これひとえに、建設省をはじめ、県の適切なご指導と、力強いご支援、更に全国各地から寄せられた物心両面の暖かいご援助によるものと、深く感謝とお礼を申し上げます。

このたび、大火復興の足どりと、よみがえる酒田の姿を要約し、パンフレットにまとめて発刊することになりましたので、ご参照賜り、今後残された復興事業に対しても、ご指導とご支援を頂ければ幸甚と存じます。

54年 8 月

酒田市長 相馬 大作



酒田市大火災

発火	昭和51年10月29日 17時40分頃
鎮火	昭和51年10月30日 5時
風速	9.0~12.4M 瞬間最大 26.7M
焼失家屋	1,774棟 1,023世帯
罹災人員	3,300人
焼失面積	22.5ha
被害額	405億円

もくじ ● 大火発生

被害概要

応急対策

復興計画

早期復興に立ちあがる 9

住民対策 10

仮換地の完了 12

大巾な利子補給 13

関連事業の整備計画 13

住宅街の復興 14

商店街の近代化事業 15

共同店舗の推進 18

市街地再開発事業 22

〃新生、酒田の街 27

モールの誘客運動 30

復興宣言 31

復興の歌高らかに 33

あとがき 34

〈表紙写真説明〉

一よみがえる近代商店街一

再開発ビル（手前）と

中町商店街



復興元年(52年10月)の被災地全景

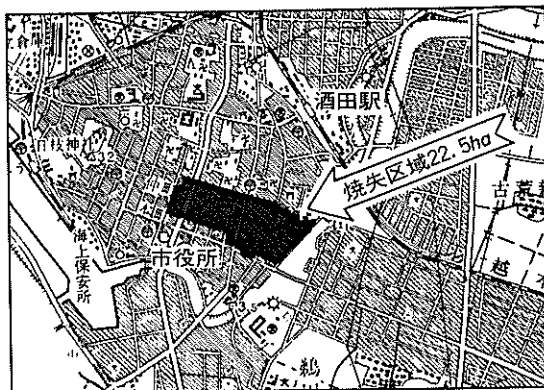
大火発生



昭和51年10月29日、朝から台風並みの強い風が吹く木枯しの寒い日であった。

この日17時40分頃、上映中の映画館グリーンハウス（中町二丁目）から出火した火災は、折から吹きまくる26.7 M（瞬間最大風速）の強風にあおられ、17時53分消防車が現地に到着したが、火元の木造建物の屋根から火煙が噴き出して放水もままならず、水柱は霧散して、火は隣家の大沼デパート脇の木造家屋より密集した商店繁華街に飛火した。18時30分頃、鉄筋コンクリート造りで地下2階、地上6階の大沼デパートに引火同ビル5階の窓から火焰放射器のように吐き出す焰は、その北側のト一屋、てぶくろなどの大型店に移り大火の様相を呈してきた。

19時58分、酒田市は災害対策本部を設置し非常配備に入る。中町地区の商店街には避難命令が発令され、巾狭い道路は家財道具を手にして火煙と火の粉の中を逃げまどう市民の群でごった返し、さながら戦時中の大空襲を思わせた。出火当時北東に流れていた火勢はやや東に変ったが、この地



酒田大火焼失区域位置平面図
(S=1:50,000)

区は酒田市の中心商店街で、大沼デパート、てぶくろ、スーパーマルイチ、協同店舗等の防火建築があり、延焼拡大を防止すること約2時間に及んだが、木造建築に包囲されたこれ等のビルも猛火には抵抗し切れず、炎は中町アーケードの上から下へと紅蓮の柱となって走り抜け東へ東へと扇状に広がり、何とも言えないような恐怖と共に重大な事態の発生を感じさせてきた。

20時30分、対策本部は自衛隊の出動を要請各所より応援にかけつけた 100台以上の消防車の活動にもかかわらず、猛火は二番町に移る。この頃、火勢を浜町通りの巾員15M道路で喰い止めようと10数台のブルドーザーを風下に待機させ、その道路の手前で破壊消防することも検討されたが、既に荒れ狂った火勢は延焼時間を短縮しながら 100～200M先に火の玉となって一番町方面に飛火しているため、破壊作戦を断念し、火勢を新井田川に追いつめながら、火勢の巾を少しでも縮少することに全力を集中した。

しかし、一番町以东には古い土蔵の外には耐火建物も数少なく、22時30分、自衛隊の先発が到着

する頃には、100棟以上の建物が次から次へと焼失し、応援にきている間に自宅が焼け出すなどの悲劇も続出した。延焼状況を把握するにも車が使用できず、烈風と時折叩きつけるような雨の中に市職員は自転車と足で走りまわった。しかし、夜空を焦がして走りまわるその300Mの猛火と焼煙、そして降り注ぐような火の粉に吞まれて活動は思うままにならず、現場待機のアマ無線の協力報告で、延焼速度が急に早くなっていることを知る。

10月30日、午前0時、焼失家屋380棟余り、新井田町まで延びた火の手はその衰えもみせず、浜田保育園にも延焼、浜田小、法務局危ふしとの情報も入り夜中の対策本部は騒然となった。県内外の消防隊の応援要請、日赤山形県支部に救援要請、避難場所の誘導、風向きの変化による避難所の変更、応援自衛隊の到着、走りまわる報道陣、一刻も早く破壊消防をと呼ぶ住民の声……。

これらの騒ぎをあざ笑うかのように火勢と風速は少しも変わらず、夜半に入って新井田町全域は火の海となり、中の口より上本町への延焼も必至とみられ、更に巾40Mを隔てた新井田川対岸にある東栄町の住宅街にも火の粉が降り住ぎ、焼失家屋も700棟を超え事態は急速に悪化した。

このため消防隊は、一部中の口にある県道酒田松山線沿いの住宅の破壊活動を開始すると共に、全消防力を新井田川対岸に集結し、ここを最後の防火線として設定、水のカーテンによる全力放水によって死守し、ようやく危機を脱した。

午前4時30分、消防本部は延焼のおそれなしと判断した。戦後四番目の酒田大火は、217台の消防車と、2,657名の消防団員の必至の活動、2,504名の自衛隊の応援にもかかわらず、出火以来11時間半に亘って燃え続け、1,023世帯を焼け尽し、3,300名の罹災者を出して、午前5時ようやく鎮火した。



一面の焼野原

①発火場所 ②焼失商店街 ③酒田市役所 ④電報電話局 ⑤本間家本邸 ⑥新井田川 ⑦浜田小学校 ⑧天真学園

被害概要

405億の損害を残した大火であったが、死者は陣頭指揮をとった消防長の殉職のみで、大きなガス爆発や、車の炎上等の二次災害がなかったことは不幸中の幸いでもあった。このことは、適切な

警備活動による避難誘導、焼ける寸前までの停電防止、業者によるプロパンボンベの回収、効を奏した破壊消防、交通規制の強化等、いくつかの要因をあげることができる。それにしても火災発生前後を含めて、20ミリ近い雨量のあったことが、焼失速度を弱め、避難行動を容易にしたものであり、加えて市民の強い連帯性が評価されている。

被害概要

区 分			被 害	備 考		被 害 額〔千円〕	
人的被害	死者	人	1	上 林 消 防 長			
	重 傷 者	人	10				
	軽 傷 者	人	993				
住宅被害	全 壊	棟	967	専用住宅	516棟	専 用 住 宅	4,500,000
		世帯	1,016	併用住宅	458棟	併 用 住 宅	6,900,000
		人	3,270	店 舗	43棟	店 舗	3,100,000
	半 壊	棟	7	そ の 他	757棟	そ の 他	3,400,000
		世帯	7	計	1,774棟	商品・償却資産	21,700,000
		人	30	焼失建物面積		商店街共有物	100,000
				152,105㎡			
非住家	公共建物	棟	1	浜 田 保 育 園			
	そ の 他	棟	799			計	39,700,000
その他の	病院	箇所	診療所 6			電 力 施 設	70,000
	道路	㎡	31,325			交通安全施設	40,000
	水道	箇所	止水栓 988			都市ガス施設	30,000
	通信	回線	1,170			プロパン施設	10,000
						電信電話施設	100,000
						公 共 施 設	550,000
						計	800,000
罹 災 世 帯	世帯	1,023			合計 40,500,000千円		
罹 災 数	人	3,300					

焼け崩れるアーケード



応 急 対 策

悪夢のような一夜は過ぎた。余燼くすぶる中で朝を迎えて、風も雨も昨夜とは比較にならぬ程静かになった。中町二丁目から新井田川まで、22.5

haの市街地は見渡す限り一面の焼野原となった。

一夜にして全ての財産を失った罹災者は、放心したように焼跡にたたずむ。しかし無惨な焼跡に残されたものは、焼けただれたトタン板とガレキの山であった。この日の朝から、自衛隊、消防団を主体とした瓦礫片付けと、災害応急対策が開始された。その主なものは次のとおりである。

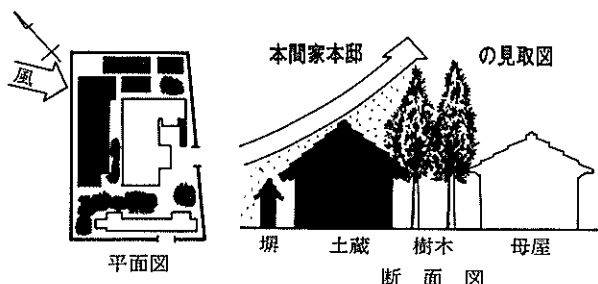
項 目		内 容
借地借家臨時処理法の適用		火事による災害を受けた借家人及び借地人の保護を図るため、11月24日よりこの法律が適用され、家屋が焼失した場合でも、ある一定期間の借地権が認められると共に、地主が家屋を建築した場合、借家人には入居の優先権が与えられる。
建築基準法84条による建築制限		罹災地に個人が勝手に家を建て始めると、区画整理事業に大きな支障があるので、一定期間建築物を制限した。制限場所は、区画整理区域内の31.9ha、1店舗当たり100㎡以下の仮設店舗、その他これに類する仮設建築物以外のすべての建築を11月4日より12月29日まで全面制限した。
住宅金融公庫の融資額の拡大		激甚災害の指定（11月24日）により、公営住宅の補助率の限度を2/3から3/4に引きあげると共に、住宅金融公庫の融資について、 木 造 320万→540万 耐火構造 440万→610万 } に引き上げ、利子は 5.5%→3%に引き下げ
救 助 活 動	避難所の設置	10月29日から12月3日まで、災害の状況に応じ、市民会館等7ヶ所に避難所を設け、延 2,202人の避難者を収容した。
	炊 出 し 等	10月29日から11月4日まで 7,486食の炊出しを実施。経費約百万
	被服・寝具支給	10月30日から11月7日まで26,400点の現物支給。経費約3千万
	医 療 関 係	10月29日から11月11日まで13医療機関で 809人の救護活動
	住宅の応急修理	半焼7世帯のうち、2戸について応急修理
	学用品の給付	11月11日から26日まで、515人に支給。経費約1千万
	輸 送 関 係	10月30日から11月7日まで、避難所び救助物資の輸送に動員した車は 200台、人夫 957人。経費約7百万
	消防隊の出動	酒田地区の消防車15台、他地区応援も含めて 217台、2,657名の消防隊が出動
	瓦 礫 片 付	自衛隊、消防団等の車 2,764台、その量は73,000㎡。経費約8千万
応 急 仮 設 住 宅		被災者よりの強い要望で、災害地にできるだけ近い場所に設置することになり、中央公民館の54戸を最高に、浜田小23戸、若浜小22戸、藤井氏宅地29戸、専修訓練校20戸、終末処理場用地50戸、計 198戸を12月20日まで完了
仮 設 店 舗		復興計画に支障のない場所（9ヶ所）に 238戸建設。
災 害 公 営 住 宅		51年度、若宮町に96戸（県営48戸、市営48戸、3DK）52年度、光ヶ丘及び富士見町に96戸（市営3DK）計 192戸建設

復興計画

「焦土に立つ、の言葉のとおり、今私共はすべてを失って廃虚に立った。夜明けと共に氣をとり戻して復興計画の第一歩が始った。その時、関係者の頭に浮かんだものは、遠い先輩がつくり上げた都市計画であった。

その代表的なものは今からおよそ 200年前、本間光丘氏がつくった18M巾の防災道路（柳小路）であり、この道路は明治27年の酒田地震による大火を完全に阻止し、今回もその目的を果たした。又防災都市の縮図として高く評価された本間家本邸の「家づくり」は、西風を土堀で防ぎ、樺の大本で火の粉を吸収し、2階建の土蔵で火を止め母屋を守る。全く理想どおりの配置計画であった。その他、多年に亘って市民から要望されていた町づくりの提言を、複雑な気持ちで整理しながら雑踏の中で復興計画は進められた。

30日夜、酒田大火復興作業の指導に当るため、建設省より派遣された4名の技術陣を迎え、翌31日の早朝から国、県、市の関係者が一体となったプロジェクトチームが結成され、11月1日の夜半まで、ほぼ2昼夜の徹夜作業の結果、都市計画道路のみなおしも含む復興計画の原案が完成し、11月4日、市の都市計画審議会の了承を得て、苦難に満ちた復興がスタートした。



防災都市づくり

一ゆとりある緑と道路の町づくりー

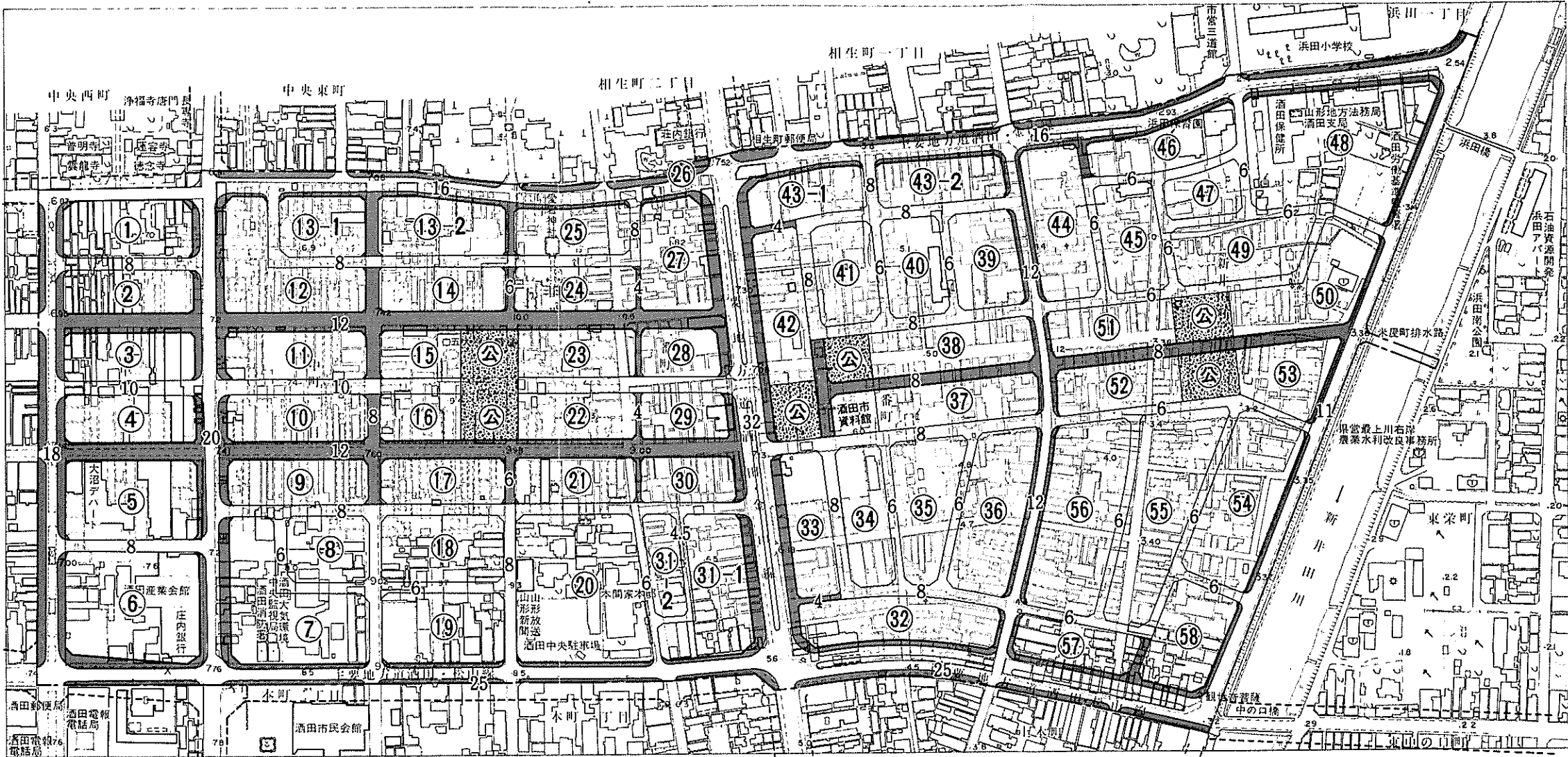
計画案の策定に当たっては「防災都市づくり」を基本とし、「近代的な魅力ある商店街の形成」と「良好な住宅街の整備」を柱とした。

■ 将来交通量に対応した幹線道路 ■

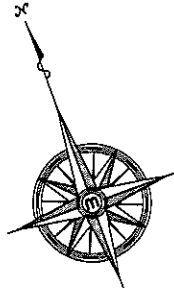
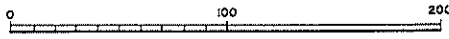
復興計画の基本となる幹線道路については、熟慮の議論が展開された。それは将来の交通量を予測することであった。幸いにして、庄内地区総合交通計画調査委員会の中間報告を採用することができた。この調査結果では、昭和60年代の交通量は、現在の約 1.5～ 3.0倍になり、駅前通り、本



酒田都市計画火災復興土地区画整理事業平面図



凡 例	
	土地区画整理事業施工区域
	都市計画で決定した幹線道路
	都市計画で決定した歩行者専用道路
	区画道路
	区画道路（歩行者専用道路）



町通り、秋田町通り、浜町通りの各幹線は、1日1.0～1.7万台と予定されている。

このため重要路線は四車線に拡幅することになり、その道路巾も現在の8～15Mから25M以上の巾員となった。更に浜町通りなどは、商店街の機能を満足させると共に、防災上の必要性から全巾32Mと決定した。

■商店街の振興と住宅環境整備■

被災地区の大半は酒田市の繁華街であり商業の中心地でもある。酒田随一のメインストリートにふさわしい魅力的な近代的商店街づくりの軸として考えられたのが、中通り、たくみ通りに計画された巾12Mのショッピングモールであり、このモールは32M道路を地下道で横断し、住宅地の8Mモール及び各種公園と連絡する。更に新井田川架橋によって東栄町方面の新興住宅街と直結されることになる。これら3本の歩行者道路は車優先の社会から脱出をはかり、緊急車以外の車を極力排除し、買物、通勤、通学、自転車道路として利用

され、安全、快適な都市環境を生み出すものと思われる。

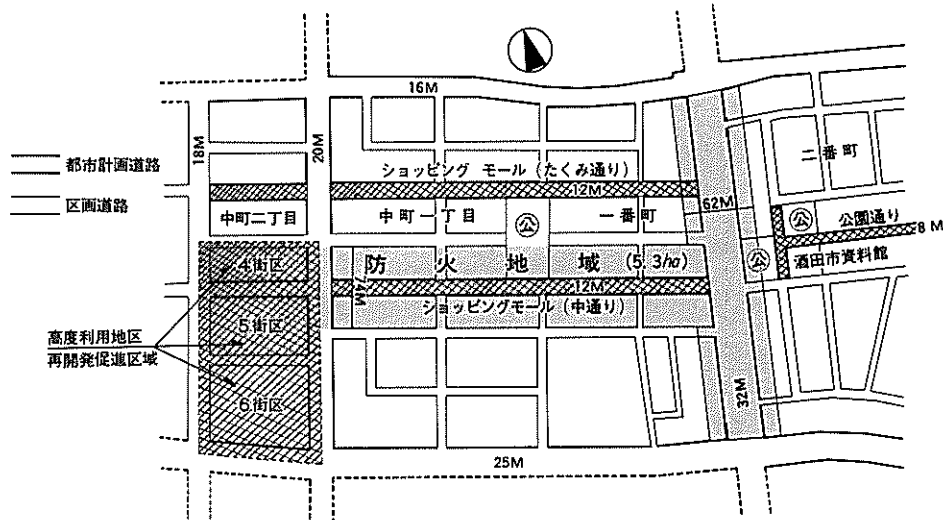
区画道路の計画について特に配慮されたものは①商店街のサービス道路の新設。②通過交通排除のため、従来の十字型交通網を整理しながら、T字及びC型とする。③すべての宅地は公道に面するようにする。④酒田における冬季北西の風を考慮して、住宅地の道路は南北方向を主な軸となるよう設計された。

■緑の空間と不燃建築■

都市緑地、駐車場等の都市空間、緑の社寺用地等が、今回の大火で延焼防止に果たした役割りは既に議論の余地はない。

復興計画ではこの点を重視し、被災地に4ヶ所の公園（総面積約7300㎡）を配置した。各公園はショッピングモールと有機的に結合して市民の利便をはかり、かつ防災上の都市空間となるよう計画された。中町の中央公園は、商店街の広場だけでなく、市民の憩いの場所としての大きな使命を

防火地域・高度利用地区、再開発促進区域



持っている。市民がそこに集まり、ショッピングを楽しむと共に、お祭り広場としても利用されよう。一番町の大通緑地、及び大通公園は、既に完成された市の資料館と一体化した都市緑地でもある。新井田公園は、子供の遊びと老人の憩いの場所として活用される。

防災都市づくりは、道路、公園等の公共的オープンスペースの確保と共に、防火建築の促進なくしてその効果は期待できない。巾40Mの新井田川と両側道路を含む60Mの都市空間によって、今回の大火が阻止されたことを考えると、32M道路のみでは防災上の不安が残る。そこで従来の準防火地域をほぼ3倍に拡大し、新たに中町地区及び大通りに面してT字型の防火地域を設定した。

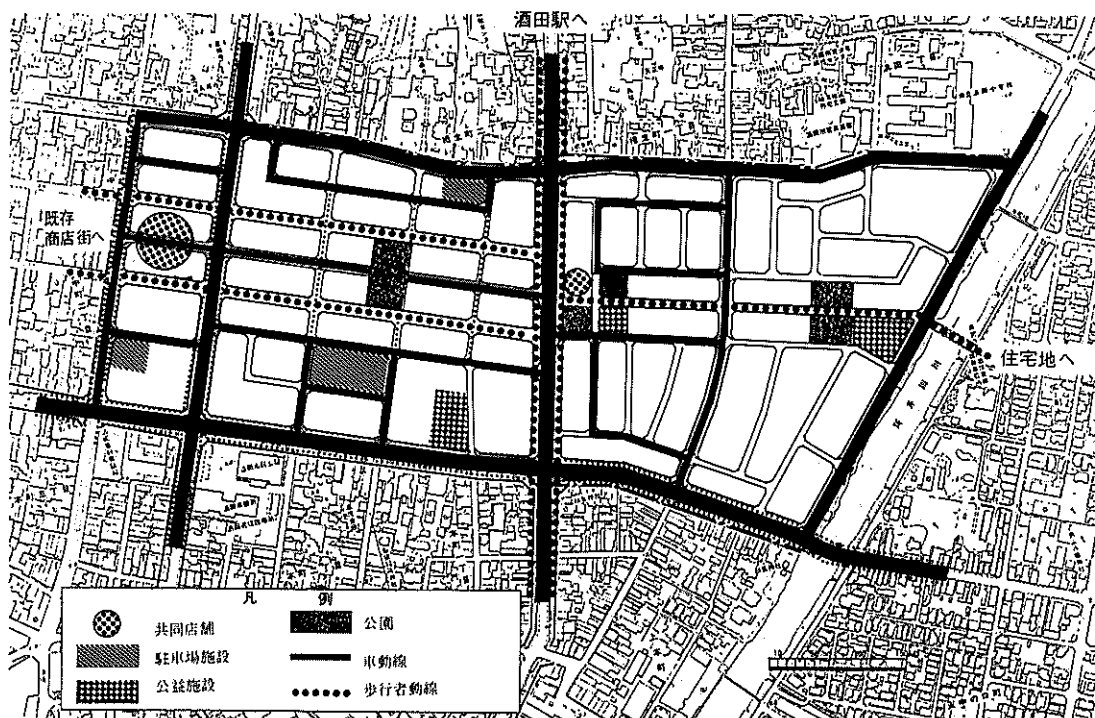
用途地域は、焼失前の用途区分、市街地再開発のマスタープランにより一部修正変更した。

■ 建築物の整備計画 ■

被災直後、酒田市は建築物の整備計画を、市街地再開発協会に委託し、商店街のみならず、全被災地の復興マスタープランを作成した。その計画の過程で、地区住民、学識経験者、関係官庁等から巾広く委員を選出し、委員会が直接市民の声を聞き、酒田の風土、気候に合致した特色ある総合計画を提言しながら、単なる建築物の設計構想ではなく、被災者にとって最も大切な融資面も同時に調整された内容とした。その中味は、商店街の規模は被災前の50%増を限度とし、駐車場は800台以上が要望され、共同店舗、共同住宅について14種類の標準設計と事業手法が組込まれた。

「融資の道あれど返済の道なし、雪深い鉛色の空をみあげて被災者の胸は苦しかった。

市街地整備イメージプラン（動線計画）



早期復興に立ちあがる

被災地の建築制限をするために、区画整理事業認可までの時間は2ヶ月しかなく、計画班の仕事は気の遠くなる程膨大であった。仮設店舗の用地選定、用地買収の計画、復興説明会、図面作製、施行区域の立会い及び測量、残存建物の調査、地下埋設物の打合せ、建築物整備計画との調整、建物補償の見積り、事業計画の作製等……残された時間は余りにも少なく、

計画班

反対にやるべき仕事は余りにも多く、すべてが時間との競争でもあった。

夜を徹した仕事が続く、予定通り事業認可に漕ぎつけた。

一定の区域の中に、広い道路と緑地等の公共用地がふえることにより、住民の減歩は増大するのは当然であり、この減歩を19%から13%以下に減らすため、19,000㎡の用地買収が短時間で必要であった。開発公社を主体とした20名の臨時用地班は、足を棒にして被災者の土地提供者探しに奔走した。土地ブローカーの暗躍を制止しながら、安い単価での買収は困難視されたが、土地区画整理組合等より代替地の協力もあって、最終的には24,000㎡の用買が年末に完了し、複雑な仮換地作業を容易にした。

用地班

大火による恐怖と不安、そして心身共に疲労していた被災者に、適切な情報を流すことが民生安定の第一歩であった。52年11月1日より12月30日まで、30回にわたって「広報さかた災害告知板」が新聞折込みで29,500部各家庭に配達され、その後も「広報さかた復興速報告知板」として、その都度配布し続けている。

住民PR班

住民PRは、都市計画と広報係が主体となり、あとで県復興事務所も担当した。正確な情報を適切に早く伝えることの重要性を、この災害を通じて深く体験させられた。



建築課が主体となった建築物整備計画班は、最初は仮設建築物の相談であったが、被災地再建のマスタープランづくりに当って、市街地再開発事業調査委員会と密接な連絡

建物班

を取りながら、14種類の建築物計画を住民に説明して、防災都市づくりの上物整備に着手した。

上物整備の手法は、大別して住宅公庫の融資による一般住宅、高度化事業による商店街づくり、更に集団化した再開発事業と移って行くが、すべての財産を失った被災者の再建は厳しく、県市の大巾な利子補給が、強く要望された。

住民対策

ガレキの山が少しづつ片付き、全国より寄せられた山のような救援物資の配布に忙殺されていた11月8日～9日、被災地区を4ブロックに区分して住民説明会の第一歩が始った。既に火災復旧の基本計画は完了しており、この計画を一刻も早く住民に説明し、事業の中味に対する理解と協力を求めることが、何よりも大切なことであった。

被災者の誰もが大火のショックと、応急対策に追われ放しで疲れ切っていた。自分の住むところはい体どうなるのか、何時から家の再建ができるのか、区画整理とはどんなものなのか……住民の不安とあせりは予想外に高く、それを反映して説明会場の空気は殺気に満ちていた。

この説明会には酒田市長以下部課長が出席、大火の経過と区画整理事業の具体的な内容、これからの対策等を悲壮な決意で市民に説明し、協力を要請した。このあと待ちかまえていたように、市民の鋭い質問が飛んだ。消火活動に大きな不満をぶちまける人、住民不在の復興計画に憤りを爆発させる人もあれば、テープレコーダーを片手にして、減歩を有償にして欲しいと訴える若い人もあった。質問する人も答える当局もお互いに不安はかくせない。それだけに真剣なやりとりが長時間続いた。

火災復興事業の困難性は誰もが承知していた。1千名を上廻る市民の財産を再分配する事業が、1回や2回の説明会で理解されることはあり得ないことであり、市民もまた、納得するまで旧町内会単位とか、組織単位の説明会を希望する機運が

みられた。県、市はこれ等すべての要望に応じ、昼夜の別なく説明会を開催した。4月末日までにこの種の説明会は61回に達し参集人員は延 4,192名となっている。

時間のある限り、あらゆる機会をつくり、あらゆる手段で住民との意見交換をしたこの復興事業も、すべての住民の合意をとりつけることはできなかった。それは事業計画に対する18件の意見書にもみられるように、住民は新しい町づくりに対し大きな変化を求めなかった。将来交通量もわかるし、歩行者専用道路の設置もよいが、明日から自分の商売がどうなるのか、自分の宅地がどう変わるのか不安であった。行政側が百年の大計と理想的な防災都市づくりに意欲を燃やせば燃やす程、住民の反発も増加する傾向であった。

そこで行政側は、大火災害復興自治協議会（被災地区全域にわたる19自治会）等の大火復興のために組織された各種団体と、密接な協議をしながら、基本的な復興計画に支障のない範囲で、事業計画の一部変更（修正）を決意し、大巾に民意を反映させた結果、事業計画決定の大きな難関を突破することができた。



早期復興を呼びかける相馬市長

酒田火災復興地区公共団体区画整理補助事業実施計画表

S-52. 8

(1)一般事項				(3)街路及び宅地の現況				(6)公共施設の整備				支 出											
施 行 者		山形県（3条3項）		道 路 延 長 率		21.34KM/KM ²		種 別		基 本 事 業 費		種 別		単 位		基 本 事 業 費							
都市計画決定		51. 11. 26		道 路 密 度		20.9%				延長 M 面積 M ²						数 量 金額(千円)							
事業計画決定		公告 51. 12. 28		市 街 化 率		99.7%		都市計画道路		◎ 4 路線		2,385		46,627		都市計画道路		築 造 m		4,459.26		159,915	
事業計画の変更		公告 52. 7. 26		建 築 率		57.5%				○ 1 路線		479		5,813		側 溝 排 水 m		3,885		109,181			
地 区 面 積		32.0ha		(4)地価の現況（S－51. 11. 5）						◇ 1 路線		342		4,132		橋 梁 ケ 所		1		132,000			
施 行 期 間		S－51～55		最高 232千円/M ² 最低63.8千円/M ²						歩 専		1,253		13,379		歩行者横断施設 ケ 所		1		123,550			
都 市 人 口		100,960人		平均 147.9千円/M ²				小 計		4,459		69,951		植 樹 m		3,389		65,800					
地 区 人 口		3,983人		(5)減 歩 率				区 画 道 路		4,553		36,071		舗 装 m ²		55,703		250,946					
地区内人口密度		124.8人/ha		公共 19.05%				特 殊 道 路		496		3,013		そ の 他 式		1		61,415					
権 利 者 数		1,006人		(実質) 12.36%				道 路 計		9,508		109,035		区 画 築 造 m		4,553.33		268,733					
(2)土地利用現況及び土地利用計画								公 園		5ヶ所		7,241		区 画 舗 装 m ²		35,640		67,509					
種 目		施 行 前			施 行 後			河 川				311		特 殊 築 造 m		496.15		22,734					
		地積(㎡)	比率(%)	筆 数	地積(㎡)	比率(%)																	
公共用地	道 路	66,876			20.93			—			107,409			33.61			(7)公益施設の整備						
	公 園	—			—			—			7,241			2.27									
	河 川	311			0.10			—			310			0.09									
	水 道	1,627			0.50			—			1,627			0.51									
	合 計	68,814			21.53			—			116,587			36.48									
宅 地	民 有 地	田 地	23			0.01			2			202,984			63.52			(8)整理後の道路					
		宅 地	231,235			72.36			2,050														
		境 内 地	3,303			1.03			3														
		公衆用道路	376			0.12			4														
		雑 種 地	1,093			0.34			14														
		計	236,030			73.86			2,073														
	公 有 地	国 有 地	2,227			0.70			2			(9)資金計画											
		国 鉄 用 地	398			0.12			2														
		県 有 地	—			—			—														
		市 有 地	7,469			2.34			12														
合 計	10,094			3.16			16			収入		総事業費 5,760,000千円		18,000円/M ²									
測 量 増	4,633			1.45			—									基本事業費 5,760,000千円		国 3,840,000 県 1,459,200 市 460,800					
総 計	319,571			100.00			2,089			319,571			100.00							用売事業費 5,768,100千円			
支 出		S－51		902,250		S－54		1,029,750		S－52		1,218,000		S－55		210,000							
合 計		S－53		2,400,000		計		5,760,000															



このようにして、被災直後に酒田市が対応した難事業は、12月1日より山形県が正式に事業主体となって進めることになった。区画整理事業は、原則的に市町村が主体となって進めるべきものであるが、●事業内容が膨大で、しかも短期間に完了する必要がある。●また財政面、組織面でもこの大事業は酒田市の能力を越えるものであることが、県施行となった主な理由である。

山形県酒田火災復興建設事務所は、県職員9名市からの派遣職員14名（あとで4名増員）で組織され、被災地の近くに「酒田再建の基地」として県、市一丸となった体制づくりで発足した。

オープンした県の復興事務所は、息つく暇もなく山積する問題の解決に全力を傾注した。正月2日、折からの吹雪の中で現地測量を再開して、道路のセンター杭を打ち、仮換地の指定を待たずに被災地内の整地と道路工事の着工に対する同意を住民に求めた結果、2月末には約90%の承諾が得られた。このことは、深い雪の中でじっとがまんし続けた被災者が、一刻も早くわが家の着工を希望したからである。

仮換地の完了

残雪をかきわけるように整地工事は進んだ。新しい砂で盛られた地肌は美しく、新しい道路や、宅盤の高底も次第にはっきりしてきたのは4月頃である。52年度の早期発注工事が着工される頃には、新しい20haの大地が西から東へと一変し、復興の息吹きが春風と共に運び込まれた。そして残されたものは新しい土地の再配分である「仮換地の指定」であった。

仮換地作業は難航した。被災地の誰もが以前の宅地と同じような利便な場所と、整形な土地を希望するのは当然である。しかし、広い道路、公園用地等に宅地は削られ、物理的に従前の宅地を与えることは不可能である。防災都市づくりの総論には賛成を惜しまなかった住民も、仮換地原案の発表（3月4日～7日）によって、自分の宅地が予想より減ったり、又希望する位置が不満だと訴えたのは、全地権者の約30%に当たる280件にも達した。

仮換地の修正作業程、難しい仕事も外にあるまい。担当者のみが知る苦しみかも知れない。一部修正することによって、修正前の地権者から新たな異議が出る等、一方がよくなれば一方が悪くなる。このように理論的に決め手のつかみにくい極めて複雑な仕事である。しかし、災害復興は地権者の同意と協力なしでは成功しない。県も市もねばり強く換地問題の調整に全力を傾注した結果、全地域の仮換地指定を実施した8月末には、数件の未調整が残っただけで、復興作業の大きな山を越すことができた。

大幅な利子補給

大火復興の基本的計画については、既に述べたとおりであるが、計画はそれぞれ理想論の入るのは当然である。この理想的な計画を如何に具体化して実現するかが、酒田大火復興の最大の鍵である。しかも各種事業が被災者の要望も最大限に受け入れながら相互に調整され、早期に完了させなければならない課題を背負っている。これが災害復興の宿命でもある。

建築物の整備は、土地の換地作業よりも複雑で困難であった。すべての財産を一夜に失った住民には何の資金もないのである。激甚災害の指定によって住宅金融公庫の融資額が（その後52年9月に改正され、耐火構造で660万木造で580万に増額された）極めて有利な条件の政府融資はあるが、「借入の道あれど返済の道なし……」の聲が、卒直に被災者の現況を物語っている。

そこで県と市が協力し、被災住宅の復興促進と被災者の負担軽減を図るため、災害認定の交付を受けた847名を対象にして、大巾な利子補給を実施することになった。その例を示すと、

標準建設費—公庫融資額—自己資金＝**不足額**

①12,720 — 6,100 — 2,544 ≒ 4,000千円

(住宅120㎡) ①×(20%) (対象額)

となる。商店は150㎡、住宅は120㎡を限度とし、利子補給対象額の限度は、RC構造で400万、W構造で180万とし、利子補給率は2.9%を5年間続けることになった。この所要額は約4億円となったが、県が⅓、市が⅓を負担する。

関連事業の整備計画

■道路整備計画■

新設及び改良を要する道路の総延長は約9.0kmであるが、焼失地の新設道路を早い年度に着工することが基本とされており、52年度で約42%、53年度で約30%を完了する予定である。

■上水道、消防施設■

上水道計画では次のような管径の増大をはかる計画である。

地区別	被災前管径	計 画
新井田町一番町	100φ以下	150φ及び200φを追加
中町地区二番町	150φ以下	150φを更に追加

火災復興区域内の消防水利については、次のような施設整備を計画した。

施設年度	消 火 栓		防 火 貯 水 槽	
52	100～200φ	17基	40屯	6カ所
53	100～300φ	3基	〃	4カ所
54	300φ	17基	〃	3カ所
55			40屯及100屯	4カ所
計		38基		17カ所

■下水道計画■

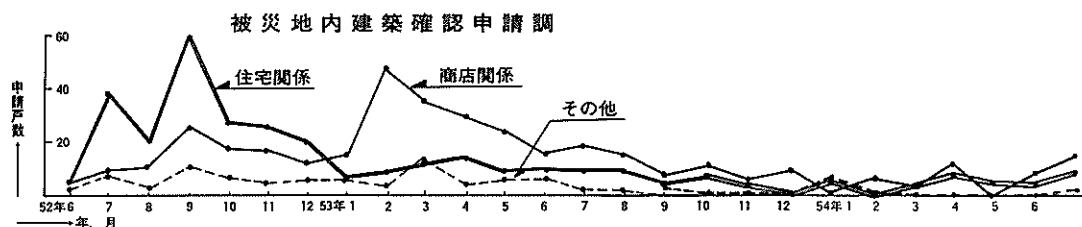
区域内の排水はすべて側溝によるものではなく路面はL型側溝、宅地の排水、汚水は道路内の管渠によって処理される。その施工区分は、

復興事務所施工(区域内)	300～500φ	延長8,595M
酒田市施工(区域内)	600～1,800φ	延長2,680M
酒田市施工(区域外)	600～2,300φ	延長1,255M

管渠布設の年次計画は、52～54年で完了の予定である。



90%完成した住宅地域（新井田町）

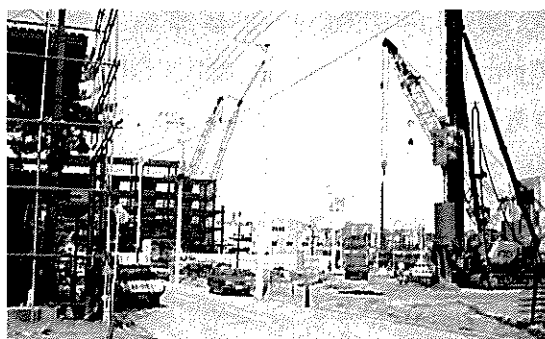


大火復興による建築物のスタートは、仮換地前に住民の協力により整地が終り、新しい区画道路と地下供給施設（ガス・水道・下水道）のほぼ完了した東の新井田町から始った。第1回の仮換地指定通知の前日（52年6月9日）、建築確認申請の第一号はY医院であった。被災地内の建築状況は上表のとおりであるが、住宅公庫の融資も決まり、「新しい年は新しいマイホーム」での合言葉に歩調を合わせるかのように、52年9月をピークとして、復興住宅建設のラッシュを迎えた。

一年前の焼野原に新しい住宅街が短期間で誕生したが、お互いに隣近所の計画が知らないで建築設計に着手したため、家屋が建ち始めてから、隣の便所の傍に自宅の居間があったり、隣家の窓と窓が突き合せることになり、どちらかに目かくし

を必要としたり、さまざまな現象が起るのも火災復興の特殊性である。市は確認申請図面を、一ブロック毎にまとめ、誰にでも公開して未然にこのような不便を防止するための指導に乗り出した。

住宅街の復興は、上表の累計に示すように、既に303戸が完成しようとしているので、特殊な人を除き、90%以上は復興されている。



商店街近代化事業も着工

商店街の近代化事業

商店街の建設は複雑であった。約 400 戸の商店のうち、その半分以上は組合組織による商店街近代化事業で、高度化事業資金の融資が決定しないと、再建のめどが立たない状態であった。被災直後、小面積の仮設店舗で営業を開始したが、売上げ減は予想以上にひどく一刻も早い再建を切望したが、新しい商店街づくりは、個人プレーよりむしろ、集団的な近代化が必要であった。

被災前、八つのブロックに区分され、それぞれ独自の立場で活躍していた商店街は、近代化事業の推進をはかるため、新しく三つの商店街に大同団結した。それが中通り、たくみ通り、大通りの振興組合である。各組合はそれぞれの地域環境に

適合した新しい商店街づくりに、指導機関の協力を得て（市は52年7月、復興対策事務所を新設、10名の職員を派遣した）涙ぐましい努力が続けられている。

魅力ある新しい近代的商店街の課題とは何か。それぞれの店舗設計に豊かな個性を発揮するのは当然であるが、酒田市のメインストリートとして発展するためには、一つの商店街として魅力ある集団的機能が必要である。それには、①ショッピングモールの総合的な活用。②駐車場、自転車置場の確保。③防災上に支障を与えないアーケードの設置。④核店舗の位置付けと回遊性の高い専門店の配置。⑤土地の高度利用をはかるための共同店舗の建設等が必要条件とされている。

何もかも計画通りに進まない火災復興の中で、商店街づくりの苦しみは格別なものがある。新し

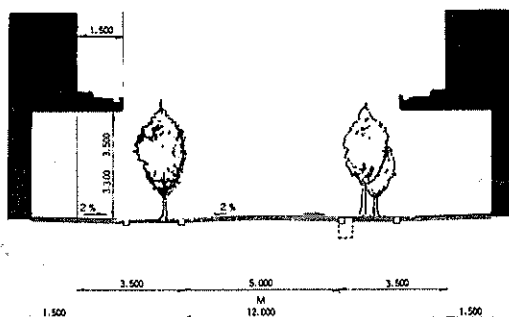


防火建築帯が誕生する

い組合を結成するための理事長の人選が、目の前に押し寄せてくる膨大な借金の返済をめぐって暗焦に乗りあげ、1ヶ月も空転することもあった。

このような苦しみの中で、1年位の期間を必要とした事業団の融資診断も、52年の8月頃から昼夜の別なく続けられ、53年の2月頃にほぼ完了して、春風と共に商店建築は一勢に着工した。

個人商店の融資と並行して大論議を呼んだのはショッピングモールと、セットバック方式による庇型のアーケードである。車の通行を禁止するモールは「商行為の自殺」とまで言われたが、官民30名余りで組織されたモール・公園協議会で、約半年に亘る論議の末、原則として緊急車以外の交通を締め出すモールが、緩かなカーブと、カラー

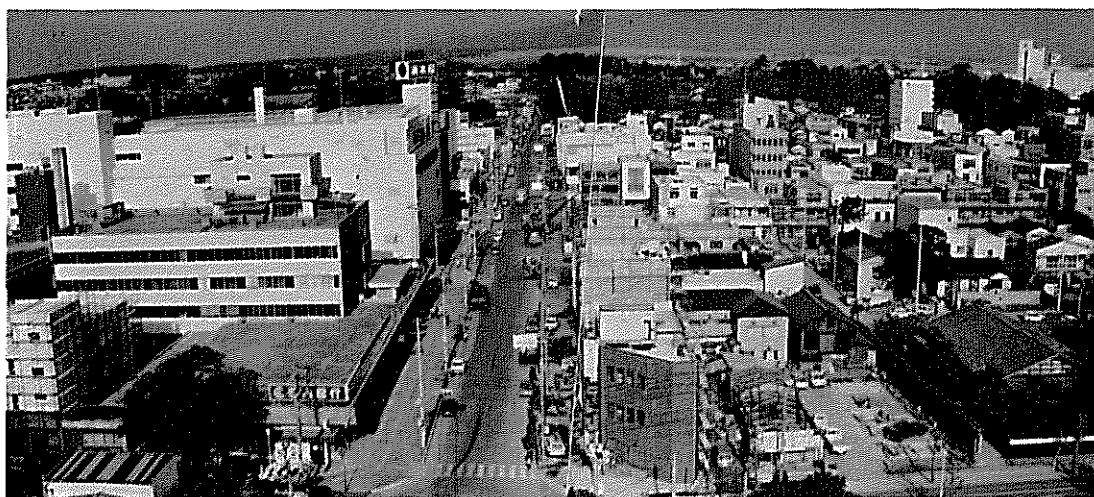


セットバック方式のアーケードと
ショッピングモール断面図（中通り）

舗装、カラーブロックの組合わせによって築造され、53年の暮れに共用開始された。その後54年の春に緑豊かな街路樹とベンチ等が整備され、近代的なショッピングモールに生まれ変わった。

次にセットバック方式のアーケードであるが、今回の大火で、火煙のトンネル役を果たしたのではないかと、防災面から強く指摘を受けた柱付のアーケード復活は強い世論に押し流されていた。しかし、冬季の風雪が強い酒田商店街にとって、アーケードなしの町づくりは、近代商店街としての魅力を半減するばかりでなく、場合によっては商売上の死活問題でもあった。この苦境を救うために市が打ち出したものが、セットバック方式の庇式アーケードである。

▶ 火災前中町商店街



◀ 商店街は一変した



中通り商店街とショッピングモール

この方法は、消防梯子車による消火と避難に支障ない範囲内で、1.5Mの柱のない底の道路占有を市が認め、更に民地内における1階部分の建物を1.5Mバックさせて、全幅3.0Mの底式アーケードをつくるものである。この方法に対して商店街は、火事で焼かれ、公共用地のために宅地を削られた外に、尚且自分の土地を公衆用の歩道に提供することは考えられないと主張する人も多数あったが、短い時間の中で商店街が先進地を視察する一方、各界代表で編成されたモール協議会の中で、あらゆる角度から検討した結果、その実現の可能性が生まれてきた。更に近代化事業の共同施設として、8割無利子融資の道が開け、中通りは民地側に1.5M、たくみ通りは0.8Mバックすることに結着し、この計画に従って各商店は1階部分を後退して建築に着手した。中通りのアーケ

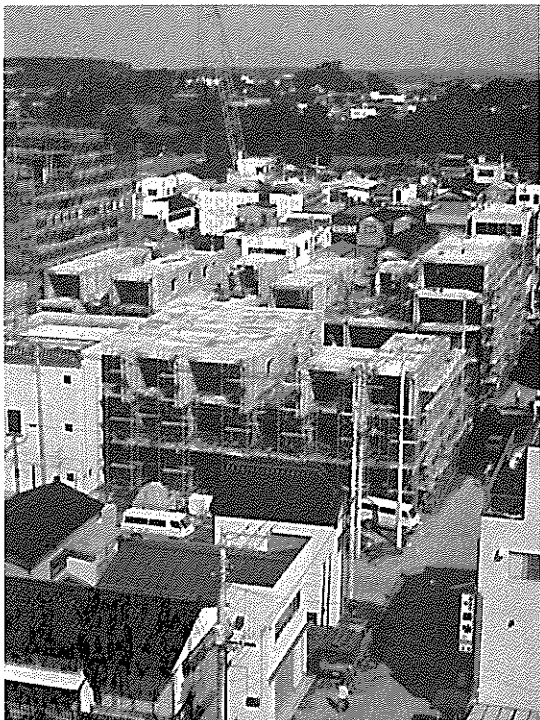
ードは54年度中に組合事業によって完成する予定であるが、たくみ通りはまだ時間がかかりそうである。

「仮設店舗で、三度目の正月を迎えるのはご免だ。」この切羽詰まった逆境をはね返すため、53年の歳末商戦にオープン目標を設定した商店街建設は、再開発事業と共に、春から夏にかけてようやく復興のうねりと化した。そして中町一帯は、時ならぬ建設の戦場となった。大型土木・建築機械が狭い未完成の道路と宅地にひしめき合い、八百人とも千人とも数えられる建設労務者と、予想しないその人達の車で町は溢れた。「風と砂と坂の町」酒田らしく、その雑踏の町に砂けむりが立って、街行く人の靴は何時も真白だった。このような建設の戦場は、大火復興の特殊性を物語る異様な光景でもあった。そこにあるものは、未来への

不安を一杯に抱えながら、尚且つ可能性を信じて挑んだ、復興への苦しい戦いが昼夜の別なく展開されていたのである。

この夏は、全国的に異常高温が続き、酒田では8月3日、40.1度（史上3番目）を記録する等、建設現場も汗にまみれる連日であった。しかし、9～10月も比較的よい天気恵まれ、建設工事は順調に進展した。そして10月、5街区のセントラルビルオープンと前後して、約半数の商店が次々に開店し、連日の如く開店祝いの花輪が町並みを色どり、新しい商店街の夜明けを迎えた。

238戸の仮設店舗は次々に取り除かれ、夢にみた新店舗は日毎にその数を増し、二年振りに賑かな歳末商戦を展開した。一部54年度に計画された店舗を除き、300戸以上の店舗が、54年の春に建ち並び、商店街はその面目を一新した。



中町一丁目のPC構法工事中

共同店舗の推進

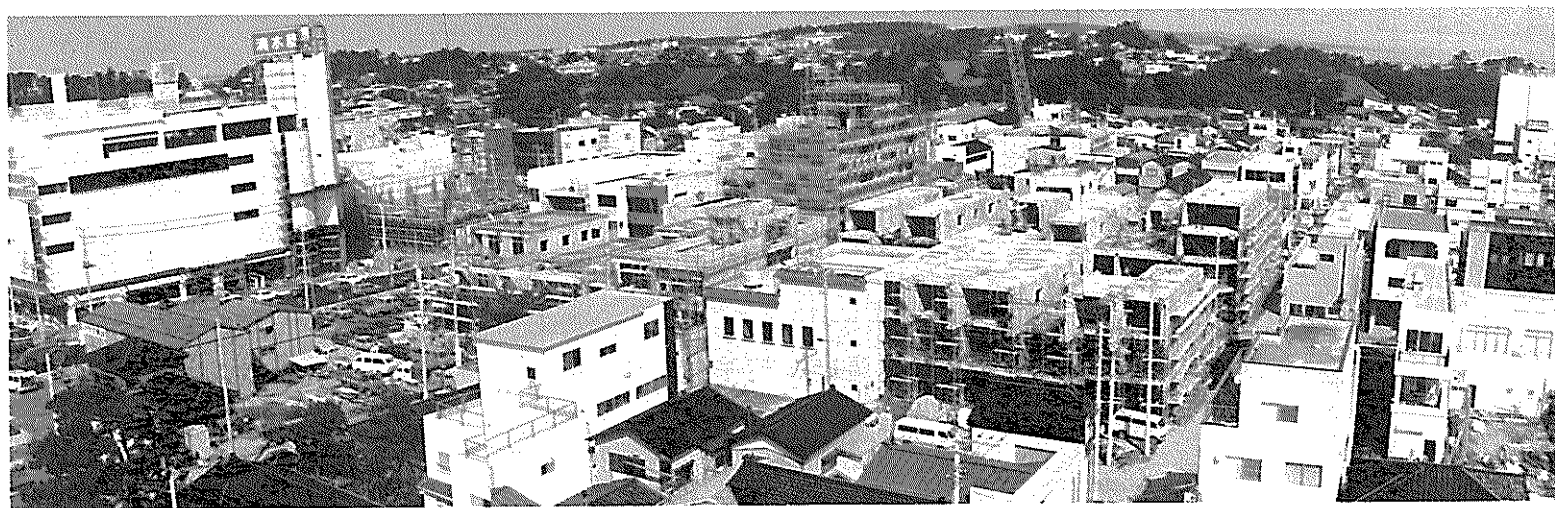
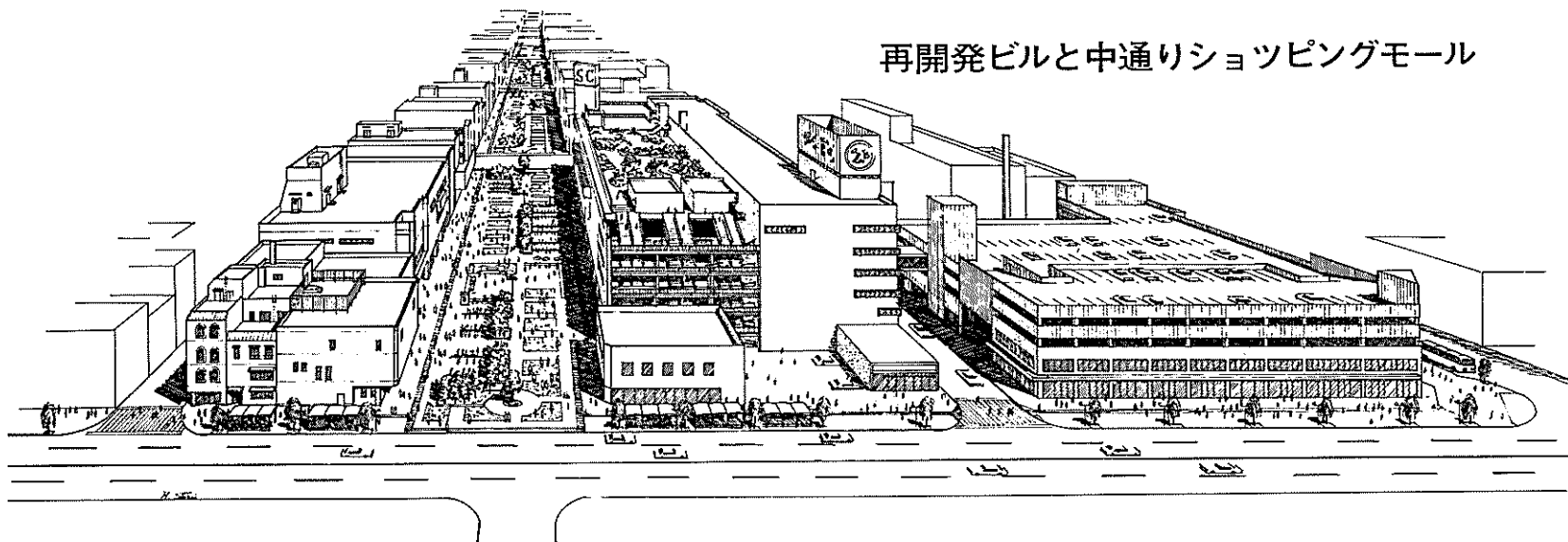
共同店舗づくりの計画についても、被災直後から真剣な論議を重ねたが、仮換地との関連もあって、その実現は極めて至難であった。数人のグループで計画をたててはみたが、その中には共同店舗づくりに不安を抱く人もあって、まとまりがつかず、気の合った人だけの仮換地を、一定の位置にまとめて欲しいとの要望もあったが、現地照応を基本とする仮換地の性格上、かなり難しい調整作業となった。

このような中で、被災直後から35名の地権者で進められた旧大工町の町づくりは、底知れぬ苦難の道を歩みながらも、不屈の努力とお互いの協調によって生み出された共同店舗計画であった。

この計画をバックアップしたのが、地元出身の中央設計グループと、酒田復興に何かを残したいと意欲を燃やした地元建設業界の有志である。三者一体で進められた計画の中味は、共同店舗による土地の高度利用、売場面積の有効活用、共通の駐車場確保、建物コストの軽減等、新しい共同店舗づくりに対していくつかの利点を持つものであった。しかしプレハブ化による量産態勢に入るには、少なくとも100戸程度の集団化が前提であったし、各店舗の間取り、階高等、少なからず制約を受ける面もあった。長い間、寝食を忘れて地権者の調整は続けられた。それも決して強制ではなく、できることだけを一步一步積みあげ方式の話し合いの中から前進を続けた。

結果的には24戸の地権者が合意し、その工法もユニットからP・C（柱、梁、床、壁等を高質で高

再開発ビルと中通りショッピングモール



完成近い中町通り

商店街近代化事業復興計画表

昭和54年 7 月
酒田市復興対策事務所

			中 通 り	たくみ通り	大 通 り	計	
組 合 員	物 品 小 売 業		79 (50) 人	51 (26) 人	40 (25) 人	170 (101) 人	
	飲 食 店 業		7 (4)	20 (9)	2 (2)	29 (15)	
	サ ー ビ ス 業		7 (3)	10 (3)	8 (4)	25 (10)	
	建 設 業 そ の 他		3 (0)	2 (1)	1 (0)	6 (1)	
	貸 店 舗 業		16 (13)	8 (3)	7 (5)	31 (21)	
	計 ()は高度化利用		112 (70)	91 (42)	58 (36)	261 (148)	
総 事 業 費	店 舗、倉 庫、事務所等		1,761,053千円	1,376,795千円	1,188,536千円	4,326,384千円	
	内 装、機 械、そ の 他		471,143	309,368	142,714	923,225	
	共 同 施 設		422,215	20,657	111,644	554,516	
	住 宅		813,672	695,928	446,230	1,955,830	
	計		3,468,083	2,402,748	1,889,124	7,759,955	
資 金 調 達 計 画	営 業 施 設	高 度 化 資 金	913,380	566,670	662,740	2,142,790	
		協 調 融 資	236,100	72,746	96,100	404,946	
		一 般 借 入 金	341,542	499,753	91,113	932,408	
		自 己 資 金	741,174	546,994	481,297	1,769,465	
		小 計	2,232,196	1,686,163	1,331,250	5,249,609	
	共 同 施 設	高 度 化 資 金	332,720	16,480	89,280	438,480	
		借 入 金	17,570			17,570	
		助 成 金	71,768	4,138	22,364	98,270	
		自 己 資 金	157	39		196	
		小 計	422,215	20,657	111,644	554,516	
	住 宅	()は住公利用者 住宅金融公庫	(53件) 351,200	(43件) 253,770	(26件) 159,400	(122件) 764,370	
		一 般 借 入 金	195,984	167,886	119,714	483,584	
		自 己 資 金	266,488	274,272	167,116	707,876	
		小 計	813,672	695,928	446,230	1,955,830	
		計	3,468,083	2,402,748	1,889,124	7,759,955	
	店 舗 等 面 積 (飲食、サー ビス含む 純売場面積)		焼 失 前 (S51年)	14,039.15m ² (6,930.00)	10,777.59m ² (6,581.70)	9,647.52m ² (5,510.97)	34,464.26m ² (19,022.67)
			近代化後 (S56年)	15,634.06m ² (8,334.96)	12,747.60m ² (7,547.18)	10,564.17m ² (6,031.52)	38,945.83m ² (21,913.66)
売 上 高		焼 失 前 (S51年)	5,358,904千円	2,852,063千円	3,303,456千円	11,514,423千円	
		近代化後 (S56年)	9,585,554	4,811,151	6,284,227	20,680,932	

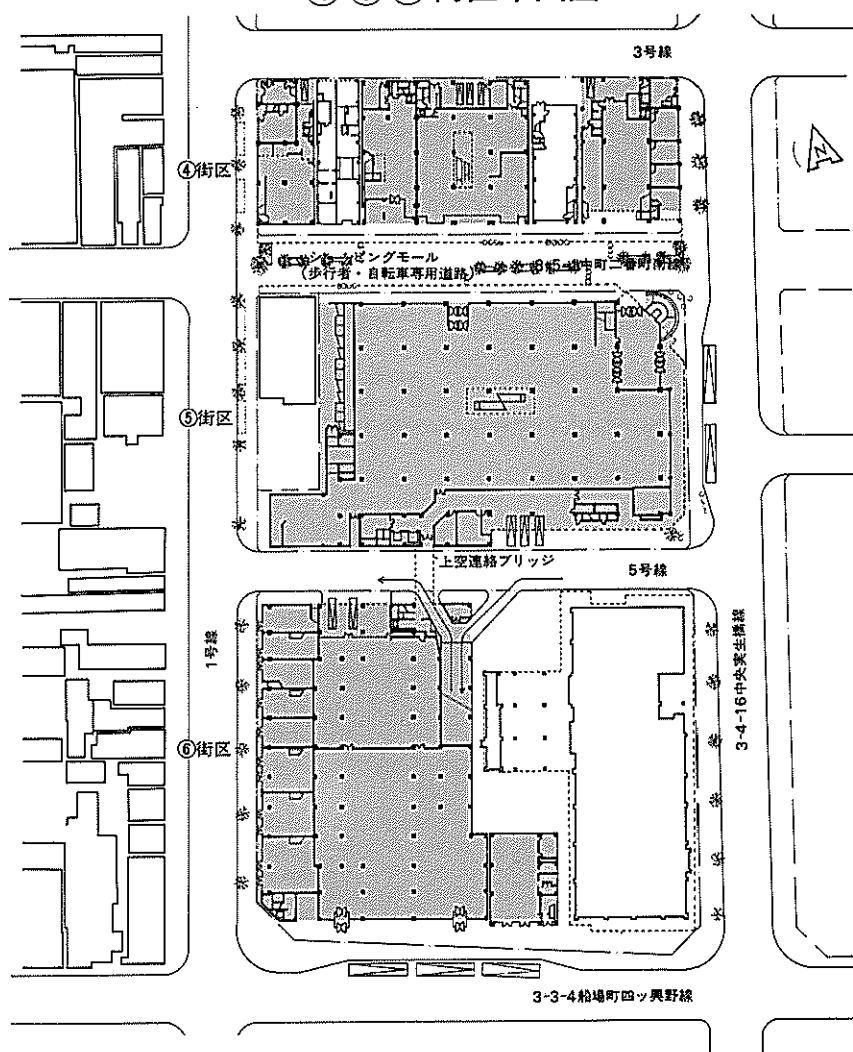
この資料は、山形県知事の認可を受けた事業計画書の集計である。

精度のコンクリートで、部品を各戸の間口や奥行きに合わせて工場で製作し、これを現地に運んで組み立てる方法）工法に切替え、53年の春にスタートした。それ以来突貫工事の連続によって、ようやくこの年の歳末商戦に、店舗部分の竣功をみることができた。

大工町の地権者が、防災都市づくりに燃やした

努力は高く評価され、行政も又、立派な一つの高層ビルよりも、町全体としての繁栄を期待される町づくりを強く推進した結果、ユニークなデザインと名前を持つ「たぐみながや」等、16棟、51戸の共同店舗が完成し、再開発事業による共同ビルも含めると、全商店延面積の60%以上共同化されたことになる。

④⑤⑥街区平面図



中町 市街地再開発事業配置図

市街地再開発事業

近代化事業と共に、土地の高度利用、建物の共同化、公共的施設の整備を目的とする市街地再開発事業は、既にマスタープランによって位置づけられた大型店舗の配置に従って、具体的に始動したのは52年の春である。マスタープランでは駅前地区の回遊性を高めるため、大型店舗は27街区と5街区付近に位置づけられていた。ところが地元を代表する大沼、清水屋の両デパートが、将来酒田の商店街が必然的に東側に移動するとの判断から、両者共に32M道路添いの27街区と、42街区付近に進出すると名乗りをあげたのである。

苦境に立ったのは、しにせ、中町地区の商店街である。マスコミは酒田随一の繁華街であった中町が、大型店舗の移動により、五等地に転落かと騒ぎ立てた。反対に喜んだのは浜町通りの商店街である。32M道路によって商店街が東西に分離される心配もあっただけに、願ってもない両デパートの進出を歓迎し、商店街を中心に受入れ態勢の準備を進めた。

一方中町地区は、しにせ、を死守するため、両デパートの進出が駄目なら、県外資本の導入も止む得ないと判断し、結束を固めて再開発事業の準備に取り組むと共に、清水屋が第5街区に核店舗として考え直すよう要望した。このような背景の中で52年6月28日、清水屋は浜町地区の進出を白紙撤回し、その後間もなく中町5街区の進出に乗り出した。

片翼を失った浜町地区は、残っている大沼デパートを27街区に定着させるため、あらゆる手段を

もって地権者の説得につとめたが、同じ街区に換地された数名の住宅関係者の同意を得ることができずして、9月末には事実上大沼進出を断念しなければならなかった。その後、大沼を核店舗とする再開発事業は、南の31街区に移った。11月8日酒田二番町市街地再開発準備組合が結成され、残された短期間に、あらゆる可能性を追求する関係者の努力が続けられたが、権利調整作業に失敗し、53年3月7日、準備組合は解散し、最後まで一筋の光明を求めてきた再開発の灯は淋しく消え去り、現在駅前地区に進出する準備中である。

酒田商人の根性を発揮した中町地区は、清水屋デパートの進出が決定することによって、再開発事業は明るいきらみとなった。52年7月に入ってから、第5街区の地権者14名は、全員同意の上に事業計画を決め異例のスピードで8月18日、第一種市街地再開発事業の認可を申請し、直ちに権利変換の具体的な取り決めに入り、キーテナントである清水屋と建設協力金、賃貸料のめどを確認しながら設計を進めた。

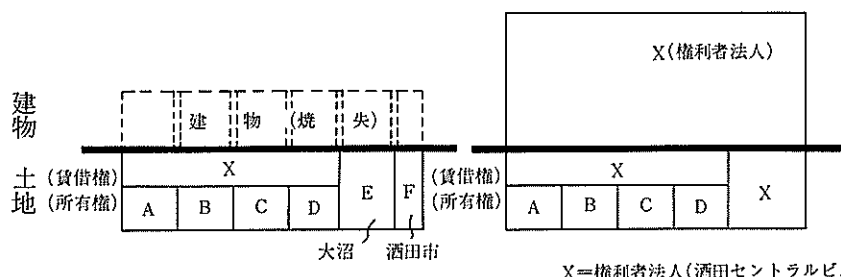
52年9月6日事業認可が出ると間もなく、この街区の権利者の内、地区外に転出（大沼店と酒田市）を希望した者を除く12名は、240万円の（あとで2千万円に増資）出資によって、株式会社酒田セントラルビルを設立し、直ちに土地所有者全員と借地契約を結び、この会社も共同施行者の一員に加わり、以後は実質的に事業のすべてを実施する母体となった。

第5街区の権利変換方式は別図のとおりであるが、土地の評価は、評価割合を70%、面積割合を30%とした。

清水屋との出店条件交渉は予想通り難航した。

権利変換方式〔第五街区〕

再 開 発 前 → 再 開 発 後



11月20日ようやく交渉が合意に至ったものの、大火二周年（53年10月）までに开店しようとする工程は既に過ぎ去っていた。11月末、大規模小売店舗届出を仙台通産局に提出し、12月18日、みぞれ降るなかで地鎮祭が行なわれた。

5街区の北側に当たる4街区は、当初、1街区1棟のビルとして建設する計画であったが、3名の権利者が不参加となり、街区は五つに分断され、各地権者の換地、業種、資金力等に応じ、5ブロックに分割して再建する考え方に変った、そのうちの三つが再開発事業として取組むことになる。

5街区の南側に当たる非焼失の6街区は、マスタープランにおいて、中町地区商店街の駐車場として位置づけされていたが、専用住宅、病院、事務所等が混在し、権利者自身としても、主体的な再開発の動機があるはずもなかった。しかし、5街

区と清水屋との出店交渉でも、400台以上の駐車場確保が前提とされており、この地区の早期開発は、4～5街区のみならず、中町地区全体にとっても極めて重要な課題であった。準備組合が4か月に亘って地権者説得につとめ、52年の暮れになって、酒田市、商工会議所、地元銀行、地元商店街及び権利者による酒田駐車ビル株式会社の設立に成功した。

しかしそのあとの作業が大変であった。代替地の斡旋、仮設店舗、仮設住宅の手当、補償額の折衝、区分所有建物の配置、価格等々、山積する問題は多いのに、その解決に与えられた時間は余りにも少なかった。54年6月9日、ようやく事業認可にこぎつけたものの、当初予定の10月末、第5街区と同時オープンの夢は絶望的となった。その頃5街区では鉄骨が組み立てられていた。



突貫工事中の再開発ビル

大火二周年目までの開店を合言葉に、各街区は事業を急いだ。それぞれの事情で工程は常におくれ、すべてのしわ寄せは工期の短縮に求められた。無理を承知の突貫工事は三つの街区で続行された。4街区のⅠ～Ⅱ工区は、53年4月に相次いで着工。この頃5街区では巨大な鉄の骨組が、春風に乗って出現し、6月に上棟式を挙げる程のスピードであった。4街区で残ったのは、事業計画の見直しで苦労した東地区である。約4か月に亘る紆余曲折を経てようやく着工した。

6街区は更に深刻であった。10月オープンは断念したものの、4階建、延1万M²の駐車ビルを、せめて年末商戦に間に合わせなければ、その価値は半減する。権利調整をあせればあせる程、そこに権利者とのトラブルが発生し、一朝一夕に解決することは不可能であった。しかしねばり強い調

整が続けられ、ようやく7月に起工式を迎えたのである。

53年10月25日、「マリーン5」の愛称で竣工したセントラルビルは、中町商店街の核としてその偉容を市民の前に現わした。7千万円を投じたショッピングモールのすばらしい施設と共に……。そして11月に入り4街区のⅡ工区、相次いで4街区東地区の商店部分、最後に6街区の駐車ビルが12月15日にオープンし、どうやら歳末商戦にかけ込みで間に合った時、関係者にかすかな笑顔がよみがえった。

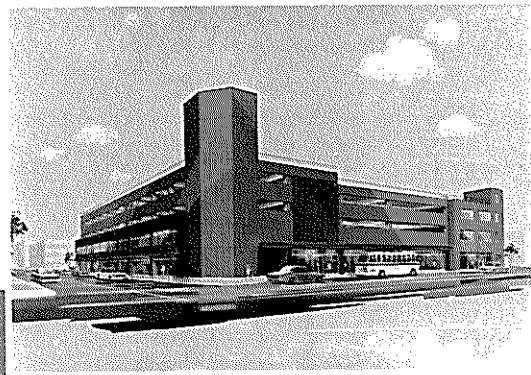
教科書がないと言われる再開発の列車は、走り走った。しかしどの車の運転も「快走」の日はなく、時には長いトンネルを潜り、時には脱線の危機も何度となく味わう羽目になったが、急ブレーキの停車を免れたのは、関係者の協力である。



四車線（巾員32M）で完成した大通り、右下は地下歩道入口



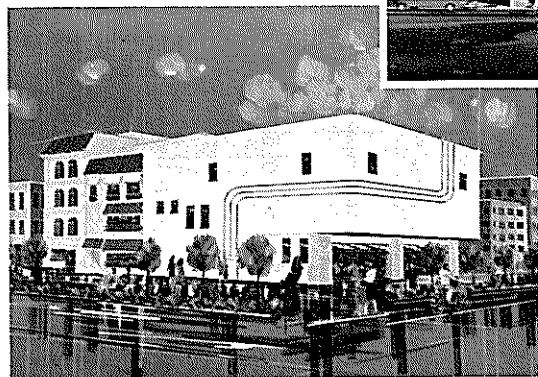
▲4街区 東地区



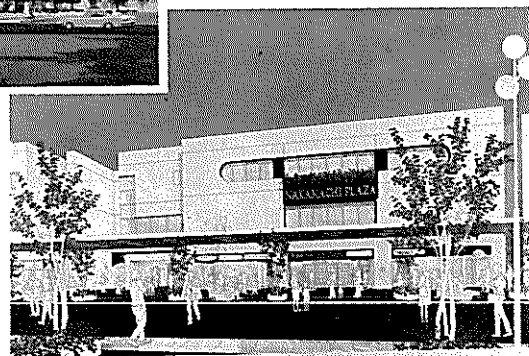
▲酒田駐車ビル



▲セントラルビル
マリーン5



▼4街区 第1工区



▼4街区 中町プラザ

大火復興酒田市中町地区市街地再開発事業概要

事業名			酒田中町第4街区第1種市街地再開発事業		酒田中町第4街区東地区第1種市街地再開発事業	酒田中町第5街区第1種市街地再開発事業	酒田中町第6街区第1種市街地再開発事業	合計	
			第1工区	第2工区					
個人旅行者(代表者名)			酒田中町第4街区第1種市街地再開発個人旅行者(荒木俊彦)	市街地再開発個人旅行者(大谷靖一郎)	酒田中町第4街区東地区第1種市街地再開発個人旅行者(玉木善一)	酒田中町第5街区第1種市街地再開発個人旅行者(仲村良夫、池田俊彦、梅屋雄)	酒田中町第6街区第1種市街地再開発個人旅行者(弦巻作治)		
権利者数	宅地所有	人	3	5	8	14	14	44	
	借地		0	0	1	3	2	6	
	借家		0	1	1	0	2	4	
	計		3	6	10	17	18	54	
土地利用	公共用地	M ²	525.05	392.26	666.77	1,605.00	1,835.21	5,024.29	
	宅地		400.33	1,140.48	686.47	4,261.75	3,913.53	10,402.56	
	計		925.38	1,532.74	1,353.24	5,866.75	5,748.74	15,426.85	
施設建築物の概要	施行地区面積	ha	0.24		0.13	0.58	0.57	1.54	
	建築敷地	M ²	400.33	1,140.48	686.47	4,261.75	3,913.53	10,402.56	
	建築面積		360.78	1,034.52	666.31	3,392.00	3,088.00	8,541.61	
	延床面積		1,262.26	3,280.48	2,172.46	19,018.00	12,572.36	38,305.56	
	建ぺい率	%	90.10	90.70	97.20	79.60	78.91	(平均) 82.11	
	容積率		315.30	287.60	316.00	449.80	321.25	(平均) 369.69	
	構造	階	鉄筋コンクリート造		鉄筋コンクリート造	鉄骨耐火造	鉄骨造一部鉄筋鉄筋コンクリート造		
	階数		地下一部1階地上4階		地上4階	地下一部1階地上6階	地上4階		
	高さ	M	17.00		21.50	30.50	22.50		
	最高軒高		13.50		18.00	21.00	11.50		
主要用途			店舗・併用住宅	店舗及び事務所	店舗・ホテル・併用住宅	店舗(デパート)	駐車場及び店舗、事務所		
資金計画	収入金	千円	補助金	25,206	57,166	37,444	514,296	123,240	757,352
			保証金・協力金	—	75,000	45,000	1,425,000	379,700	1,924,700
			借入金日本開発銀行	100,000	200,000	110,000	1,300,000	540,000	2,250,000
			借入金一般市中銀行	35,000	78,148	83,950	50,000	62,188	309,286
			自己資金・他	43,455	4,800	10,000	20,000	20,000	98,255
			計	203,661	415,114	286,394	3,309,296	1,125,128	5,339,593
	支出金		調査・設計	10,900	25,400	18,450	105,586	47,720	208,056
			土地整備・補償	—	2,760	—	446,500	236,589	685,849
			施設建築物工事費	186,645	362,500	258,000	2,201,130	800,970	3,809,065
			モール・底等負担金	2,490	13,572	4,797	38,656	—	59,515
事業スケジュール	年月日	日	事務費・他	3,626	10,882	5,147	517,424	40,029	577,108
			計	203,661	415,114	286,394	3,309,296	1,125,128	5,339,593
			高度利用地区都市計画決定	52. 6. 1	52. 6. 1	52. 6. 1	52. 6. 1	53. 3. 25	
			再開発促進区域	52. 6. 1	52. 6. 1	52. 6. 1	52. 6. 1	53. 3. 25	
			事業施行認可申請	52. 12. 27	52. 12. 27	53. 5. 2	52. 8. 18	53. 6. 8	
			事業施行認可公告	53. 1. 30	53. 1. 30	53. 5. 24	52. 9. 9	53. 6. 19	
			権利変換認可公告	53. 5. 9	53. 5. 9	53. 10. 26	52. 12. 28	53. 10. 25	
			工事着手	53. 4. 10	53. 4. 19	53. 7. 22	52. 12. 18	53. 7. 13	
			工事竣功	53. 11. 14	53. 10. 24	54. 3. 20	53. 10. 20	54. 1. 16	
			清算予定	54. 12.	54. 12.	54. 12.	54. 12.	54. 12.	
工事完了公告予定	54. 12.	54. 12.	54. 12.	54. 12.	54. 12.				
その他			売場面積 587m ² 3店(ト一屋、ケルン、若木時計店)	売場面積 1,308m ² 7店舗	売場面積 1,890m ² 12店舗	売場面積 12,507m ² 滑水屋外17店舗	売場面積1,759m ² 14店舗(地権者外) 駐車台数325台5F 将来増築計画予定	売場面積18,051m ²	

『新生』酒田の街



大火復興の主役となった面的な土地区画整理事業は、一部の街路整備と清算事務を残して今、全事業（57.6億円）の完了を目前にしている。この事業の山と言われた仮換地指定も、県復興事務所の努力によって、行政不服の請求皆無という金字塔が実現した。残された街路事業や、家屋移転もすべて54年度中に完了し、清算事務の90%も今年度中に達成可能となり、大火復興区画整理事業は実質的に予定工期を一年短縮した。

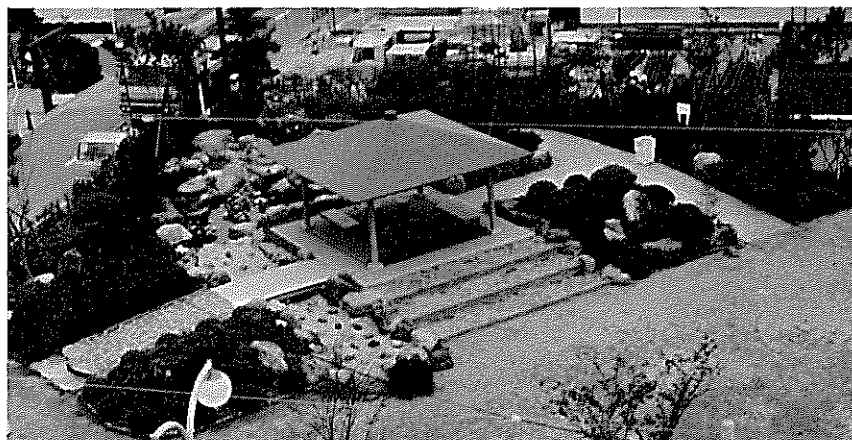
主要幹線道路の32M大通りは、庄内地区で初めての市街地四車線として誕生した。中央分離帯のこんもりとした低木の緑と街路灯、両側 6.5M幅の歩道には、防火樹としてのモチの木が植栽されて、大通り商店街で設置した商店照明灯と調和がとれている。その両側は防火地域であるので、耐火建築商店街が建ち並ぶ。かつて15M幅の狭い道路に、76戸の仮設店舗が営業したとは想像も出来ない程変身した。

中央通り20Mの両側には、6階建てのセントラ

ルビルをはじめ、カラフルな商店が軒を連らね、この一角だけを眺める時20万都市の風格さえ感じさせる。商店街を東西に横たわる二本のショッピングモールも、大きくゆるやかなカーブを持ち、赤いカラー舗装が目にしめるように鮮かである。高価なそしてモダンな照明灯がいくつも設置されて、商店街の夜空を照らし、タブ・カエデの緑も新生酒田を祝福しているようだ。

区画整理事業と共に、復興建設の主体となった商店街近代化事業も、一部の商店と共設事業を残して完了し、市街地再開発事業も又、柳小路の歩道整備だけが54年度事業として近く完了する。その外、関連事業の水道、下水道、消防施設も、一部道路工事と併設部分は未了であるが、これも54年度中にはすべて完了する。

商店街の中央に設置された中央公園は、地下に100台収容の駐車場（中通り商店街で建設）と、80トンの防火用水も設置され、多目的利用となったが、予想通りお祭り広場と、市民の集まりの場



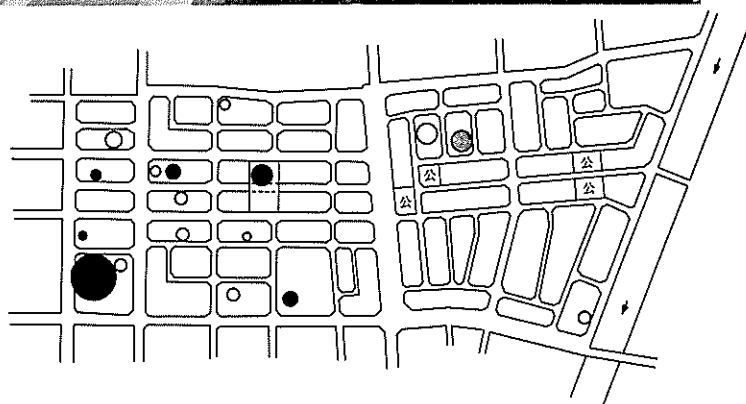
日本庭園を感じ
させる大通り公園



緑で包まれた
大通りの中央分離帯



中通り商店街



○	10台以上
○	20台以上
○	30台以上
○	50台以上
○	100台以上

●	有料時間制駐車場(利用者負担)	492台	合 計 963台
●	有料月極商店主負担駐車場(利用者無料)	115台	
○	無料駐車場	356台	

註: 図面は10台以上の配置を示す

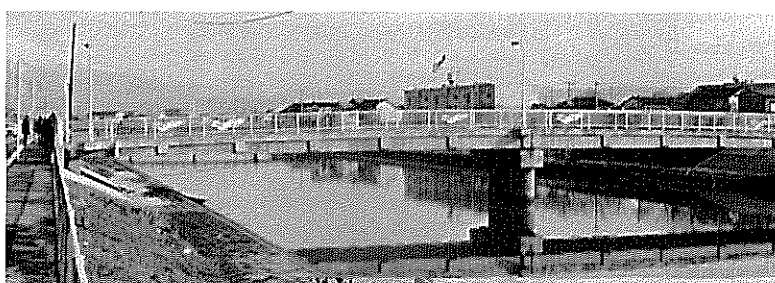
被災地内客用駐車場位置図

に使用されている。

ショッピングモールから32M大通りを横断する地下歩道も54年6月開通した。地下道を潜り抜ければ大通り緑地がある。赤いタイルの広場と緑、そして中央には10M角の池があり、防災の塔が建設された。すぐ東側には資料館が先に建設され、その北側には日本庭園を思わせるような大通り公園が完成した。総桧づくりの東屋、せせらぎを呼び起こす子供用の浅い池、高盛土の周囲の多種多

様な緑が特色である。住宅街の中央にある新井田公園に遊ぶ幼児の群れ、安らぎと憩いを求める老人の顔にも、もはやあの頃の暗い影はない。

広い道路と緑の公園、一千本に及ぶ街路樹、建築物の不燃率72%、防火地域を埋めた耐火建築、960台を越す客用駐車場等々、防災都市づくりの悲願は、2年半という極めて短い期間の中で誕生し、酒田の町はよみがえった。



◀ 新栄橋の開通により、商店街と新興住宅街が直結された

▶
中町モール
と商店街の
賑わい



新しい住宅街が誕生した（上方 新井田川）54. 4

モールの誘客運動

「三度目の正月は新店舗で……」この切ない酒田商人の悲願はほぼ達せられ、54年元旦零時を期して、たくみ通りモールの街灯点灯式が行なわれた。凍てつく白銀を踏んで多数の市民がそこに集まり、82灯の照明灯が一斉に点灯されると、爆竹が鳴り、拍手が起こり、鏡開きの祝酒で新年を迎えた。

華やかにオープンした店舗は、カラフルで新鮮さに溢れていた。そこに誰もが期待したのは、被災前にも勝る人の流れであり客の導入であった。ところが新しい商店街に流れる客足は、再開発ビルを除いて、予想もしなかった程低調そのものであった。「こんな筈ではなかった……」と誰もが首をかしげた。これに対する巷の声は、①復興店舗はあまりにもきれい過ぎて泥靴で入るのが気がひける。②ひやかしのできない店ばかりだ。③どこにどんな店があるのか、まだよくわからない。④駐車場への誘導案内が不備だ。⑤仮設店舗生活の中で客層が変わり、固定客がまだ戻っていない。⑥売場面積が過剰気味で、業種間の競合がひど過ぎる。……等であったが、一部商店街ではモールに車を通すべきだとする意見も出された。

このような背景の中で、中通り、たくみ通りの商店街も対策を協議し、ショッピングモールを使用した誘客運動に乗り出した。その第一陣は、54年4月1日より一週間、たくみ通りで植木市を開き、かなりの成果をあげた。このあと、ゴールデンウィークをねらった本格的な誘客作戦は、中町モールの中古車展示会、中央公園でのカラオケ大

会等で景気をつけ、5月5日、同公園で酒田市が一万本の緑を市民にプレゼントする等、積極的な運動を展開した。モール利用の行事と並行して、各商店街もワゴンセール等で氣勢をあげれば、連日の好天とも重なってかなりの誘客に成功した。

続いて5月8日、春のミス交通安全会のパレード、又土曜日の午後をねらった中町モールでのラジオ実況放送「酒田の町から今日は」等、多彩な行事を繰返しながら、あの手この手でモール活用と誘客に努力を続けながら復興祭りに突入した。

これ等の行事と並行してモール、公園の管理についても検討が進みつつある。市の原則的な考えは、一般市民の利便と緊急車の侵入を阻害しない範囲で、モールも公園も大いに利用してもらい、同時に何時もきれいなものとして維持管理するために、通常必要な清掃、散水、除草、ゴミ集収等を商店街に委託しようとするものであり、商店街も基本的に合意した。やがてモール利用運営方針の規定が近く確立されよう。



▲たくみ通りの植木市



▲緑のプレゼント

54年 7 月



-  住宅金融公庫(激甚災害)
 商店街近代化事業
 市街地再開発事業
 その他の資金
 公園緑地
 耐火建築



再開発事業による共同店舗



近代化事業によるたくみ通り商店街



住宅金融公庫による住宅街



「全国の皆さん、心暖まるご支援ほんとうに有難うございました。おかげさまで酒田は見事に復興することができました。…」酒田市の大火復興式典は、被災地の復興がほぼ完了したのを契機として、この大事業に絶大な指導と援助を寄せられた国及び県をはじめ、全国各地からの心暖まるご協力に感謝し、併せて「新生酒田」の復興ぶりを全国に紹介しようと計画されたものである。

昭和54年5月19日、酒田市民会館は、全被災者をはじめ多数の来賓と招待者によって、びっしり埋め尽くされた。式典は午前10時、復興太鼓の音で幕を開け、伝統的な獅子舞、復興体操、被災園児のひまわりマーチ踊りのあと、大火の記録映画「炎の軌跡」の一部が上映されると、二年半前、夜空を焦がした火柱がスクリーンに再現された。

逃げまどう市民、必死の消火活動、突走る猛火

誰もがあの大火の恐怖に今更ながら胸を締めつけられる思いであった。このあと、市民がつくった防災の歌「明日に生きる酒田」のメロディーが、静かに悲しく流れて、被災者の涙を誘った。そして、酒田市の歴史的な一瞬がやってきた。

あの、烈風と猛火につつまれ、みぞれと、火の粉に追われて逃げまどった夜から二年六か月……

全国の皆さん、県民の皆さんの、心あたたまはげましと、ご援助、全市民のかたい連帯とご助力、リ災したかたがたの、血のにじむような努力によって、見事に酒田は復興しました。

ここに復興を宣言いたします……（後略）

市長と被災した浜田小学校の児童達が、一節、一節囃みしめるように復興宣言を読みあげると、会場から大きな拍手がわき起こった。

式典は第二部に入り、相馬市長が、「大火復興



中央公園のモニュメント〔新生〕

は重い荷を背負って、ゆっくり歩むことは許されず、走りながら考える日日でした。……ほんとうの復興はむしろこれからが正念場であり、力強く市民と共に前進する」と式辞を述べ、被災者自治会、商店街代表から感謝の言葉が述べられた。引き続き、建設省井上次官等の祝辞と感謝状及び花束贈呈があり、金沢明子さんの「酒田音頭」で幕を閉じた。

このあと中央公園では、「新生酒田」の前途を祈るモニュメントの除幕式が行われた。中学校音楽隊のファンファーレを合図に、市長と大火当日生れた二人の子供がテープを引いた。白い幕が落ち、酒田市のマークを掲げたブロンズの裸婦像が五月晴れの青空にくっきり浮かび上がった瞬間、中央公園を埋め尽くした千人以上の市民と招待者から、割れるような拍手が湧き起った。同時に、ミス復興の手でくす玉が割られると爆竹が鳴り、会場いっぱいに花吹雪が舞った。

「ようやく復興した。……」集った市民のどの顔にも喜びがある。しかし、その喜びの中に、長

く苦しかった二年半に亙る血みどろの苦闘を忘れたのではなかった。記録映画に身震いを感じ、市長式辞に涙をこらえる被災者の表情こそが、何よりもこの復興戦争の激しさと苦しみを物語っていた。

力強い復興宣言の喜びに湧いた酒田のまちは、その翌日、復興祭を迎え、17万人の人出で空前の賑わいに酔った。この日の午後、軽快な酒田ばやしがモールに鳴り響き、亀鉦、今年から初登場したジャンボ獅子、おぼこ山車、そして数多くの樽みこしの行列が長く続いた。沿道を埋めた人達も惜しめない拍手を送り、「新生酒田まつり」は、最高潮に達した。



除幕式に散る花吹雪



復興まつりは17万人の人出と喜びに湧いた

復興の歌高らかに



大通り緑地の噴水と(仮称)防災の塔

昭和53年10月、酒田青年会議所広報紙は、「私たちは、大火復興のため、全国各地青年会議所から寄せられた好意を無にすることなく、再びあのような災害を起こすことのないよう『防災意識の高揚』に努めることを、私たちの大きな事業として考えている。その具体案として、『防災の歌』を広く市民の方々に呼びかけ、多数の応募作品の中から〈詩〉と〈メロディー〉を選ばせてもらった。酒田市民が永く愛唱することにより、防災意識が高まり、次代を担う子供達にも伝え得ると考えている。更に被災地のやや中心にあって、酒田市が大通り緑地として計画している広場に、再び大火を起こさぬことを祈願して、シンボルタワー『防災の塔』を建設し、そこからメロディーを流す計画である」と伝えている。

大火二年目に当たる53年10月29日、防災の歌「明

日に生きる酒田」の発表会が市民会館で開催された。作詩は本間和子さん、作曲は白根靖大君、共に市内在住の若人である。そして補作は、音楽家の神津善行氏であった。

発表会は西村理事長の挨拶、相馬市長の祝辞のあと、防災の塔の模型が理事長から市長に手渡された。続いて神津さんの指揮で、防災の歌の大合唱があって、会場を埋めた多くの市民に深い感銘を与えた。

53年の暮れから青年会議所と市との間で、防災の塔建設と公園整備について具体的な検討に入った。広さ約 900 M²の広場周囲を緑で囲み、その中央に 10M平方の池があり、3段式変化の噴

水が防災の塔にしぶきをかける案にまとまった。そして防災の塔は青年会議所が、その他の公園施設は酒田市が施行することになった。

長い梅雨も明けた54年7月末、黒みかげ石で包まれた高さ 7.8M、その上に三角形の翼(全幅 8 M)がはばたく防災の塔が、市民の前に姿をみせた。塔の胴体は、あの恐い火柱を象徴し、4か所の噴水は、必死の消火活動を連想させる。高さ 2M、片翼長さ 4M、ステンレスの三角翼は、火と水の戦いの中から生まれた新しい酒田の飛躍と希望を現わしている。

真夏の太陽が西に傾き、紅の夕暮れが訪れた午後 5時40分、二年半前の出火時間に、この塔から防災の歌が流れた。

冬へ急ぐ落葉と共に消え去り 炎と燃えた
美しい街酒田よ 風吹く街

薄れ日に揺れる白い哀しみよ……

北国の冬は寂しい　そして赤い炎が街を
駆け抜けた後の焼けた原野を
ただ粉雪が埋めるばかり……　（後略）

数知れぬ悲しみと、その悲しみを乗り越えて築
きあげた復興の喜びに包まれたメロディーは、深
く市民の心に刻み込まれると共に、この大火の恐
怖と数々の教訓も又、長く子孫に伝えられること
であろう。



夜空に輝く照明灯

◆ 大火の痛手にも負けず、二年半という異例のスピードで復興を宣言した酒田市は、さまざまな角度から全国の注目を集めているようです。全国各地より寄せられた暖いご援助に対し、復興の歩みと、新生酒田の息吹きを、ありのままの姿でお伝えできれば幸いです。

◆ 「どうしてこんなに早く復興したのだろうか」とよく言われるが、早期復興の原動力は、言うまでもなく、あの夜の底知れぬ恐怖を肌で感じた市民の協力であるが、全国民の支援により、廃虚の中から這い出し、大雪の中では歯を喰いしばりながら、仮設建物でじっと堪え、泥にまみれながらも「防災都市づくり」の悲願をこめて、不死

鳥の如く立ちあがった酒田市民性こそが、よくこの難事業を達成させたものと信じています。

◆ 酒田の街は確かによみがえった。しかしそれは、あくまで外観的であると言っても過言ではない。莫大な借財を背負って、真の正念場はむしろこれからである。今市民は、長い二ケ年半の激しかった戦いの灯を街角に見出し、明日も続く苦難の道に新しい意欲を燃やしている。（54.8.1）

編集 建設部 都市計画課
復興対策事務所

よみがえる酒田

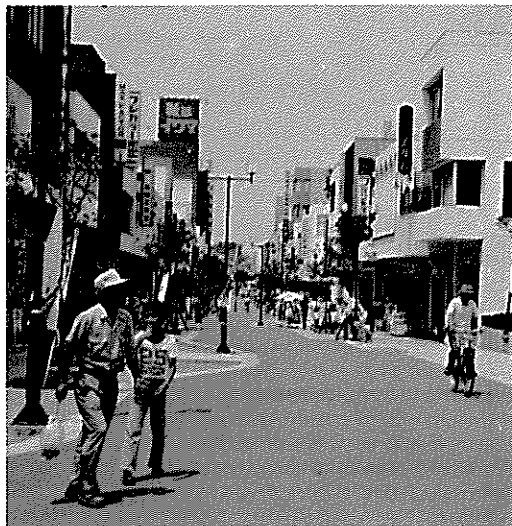
い ま き 丘

鉛色の空が 不気味に動く夕餉どき
グリーンハウスから出た 炎は
あつという間に 大沼から噴火し
放水は雨交りの風に煽られて火に届かず
どす黒い炎が アークードを突走ると
名のある建物が 次から次と焼け落ちた
必死の消火をあざ笑うかのように 炎は拡がり
町から通りへと飛火し 延びてゆく
電柱が崩れ トランスが焼け落ち
紅く映える空は 東へ東へと移って行った
ゆつくりと時間をかけ 暴れ廻った炎は
悪魔のツメ跡を残して 晩秋の朝空へ消え去った
くすぶる焼跡に 茫然と立ちすくむ
ボロ布のように 焼かれた街
怒りと屈辱に哭いたあの夜を 決して忘れない

のしかかる重荷と不安
殺気立つ焦りと 苛立ち
苦悩に明け暮れた 復興の日日は
血と涙と魂の記録であり 未来への遺産である
白鳥の帰った河口に 陽炎の燃える頃
うすもやを裂いて ブルが唸り
クレーンが軌しめ ショベルカーが走り
鉄槌が地響を立てて 足元を揺がす
力強く罫する建設の ひびきは
東の住宅街から起り やがて西の商店街へ
傷だらけの焦土から這い上った 街づくりの音は
一夜で繁華街を焼いた 炎への挑戦である

雪が消え 花が散り また迎えた秋
火の粉に染った同じ空に ネオンが光り
風と砂と坂の町「酒田」は新しく生れ変わった
水で死守した川辺の道は 橋と緑で装おい
四車線道路が 長くまっすぐに伸び
公園 広場 資料館 野外ステージが並び
煉瓦色のカラータイルが モールを埋め
近代商店街は 一斉にオープンした
煙に巻かれ 炎に怖びえた夜から二年半
柔かい春の陽差しを浴びて
あの町 この街に車が動き 人波が揺れ
「大火復興宣言」に街は湧き返った
新生酒田の前途を祈る モニュメント
白い幕が落とされると
爆竹が鳴り くす玉が割れ 花吹雪が舞い
プロンズの裸婦像が 五月晴れの青空に浮かぶ
復興祭は十七万の人出に賑わい
酒田の街は今 新しくよみがえった

瓦礫の中から 不死鳥が飛び立った
だが
火傷跡が すっかり消え
自由に 大空を翔べる日は
未だ遠い……………



よみがえる商店街



復興のうねり



焼跡はガレキの山



大 火 の 夜

